別府市美術館所蔵品の紹介

今村弥生

I

その昔の鎌倉時代、伊予国生まれの遊行上人一遍が上陸されたと伝えられる海岸、そこは上人ケ浜[1]と名づけられている。

白く輝く美しい砂浜が広がり、青々とした松林が続き、温泉が湧き清水が流れ、史跡が点在する風光明媚な土地。一遍の昔に開かれた寺院や旧跡が、この一帯から鉄輪温泉辺りに今なお現存する。

他のどこにも勝るこの六つの要素をもった土地を人々は六勝園と呼び習わし、この地の由来になっている。[2]

別府市美術館は、この六勝園の上人ケ浜公園の中に建っている。海面埋立の進んだ現在では唯一昔の海岸が残る貴重な自然海岸の一隅である。

日豊本線別府駅よりバスで約十五分程、六十一年三月からは当館より徒歩三分の場所にJR別府大学駅も開通した。国道十号線に面している事からも、交通の便はすこぶる良好である。自動車で二〜三分の所に関西汽船の発着場もある。仏の里国東までなら四十分程で行けるだろう。

ところで、現在地に当館が開設したのが昭和五十九年五月十日である。

しかし美術館そのものの歴史は古く、大正十五年創設された東京都美術館に二十余年遅れるが、昭和二十五年からのスタートとなる。ちなみに、東京国立近代美術館と、ブリヂストン美術館が開設されたのが、昭和二十七年であることを考えれば、当時の規模はともあれ、先端を行く美術館のオープンであったといえる。その画期的な美術館開設にあたっては、先ずはじめに記しておかなければならない最も重要な人物がいる。佐藤慶太郎である。彼の助力なしでは今日の別府市美術館の原型はなかったのではあるまいか。

佐藤慶太郎は、明治元年、現在の北九州市八幡区の出身で、長じて石炭業界に入り、後世「石炭の神様」と呼ばれた人である。

当館は彼の寄付金を基金として設立されたのである。彼は大変な篤志家であり、昭和五十年に新装オープンする前の、旧東京都美術館の開設も彼がその設立資金を当時の東京府に寄付したことに始まる。現在その遺徳を讃えるため、当館ロビーには朝倉文夫作の慶太郎胸像、洋画展示室には岡田三郎助画の肖像画が展示されている。

また、作品の選択収集に関しては、郷土出身であった日本画の福田

平八郎、洋画の佐藤敬両氏に依頼し、今日のコレクションの中心になっている作品が、この時収集される事となった。

開設当時から現在地に移転するまでは、街の中心部にある公民館や文化会館の特設展示室で細やかに展示されていたが、以前から現在地にあったホテルの建物を寄贈されたのを機に初めて美術館として独立、今日にいたった[3]（挿図1・2）。

開設当初の収集数は、日本画、洋画のみで二十点あまり、現在では日本画二十五点、洋画五十八点（昭和六十一年度調べ）、さらに彫刻、工芸、書跡、および、考古学、民俗資料、展示品のユニークさから話題を呼んだ漫画原画のコーナーまで加え、美術室エリアと民俗資料室エリアの両面で、常設展示館として開設している。

収蔵品の日本画では、日本画界の重鎮として知られる村上華岳をはじめ、山口華楊、菊池契月、徳岡神泉、郷土出身作家として福田平八郎、正井和行、池田栄広など、常時十六点前後を展示している。

洋画は安井曽太郎、梅原龍三郎、ユーゲニズムの画家岡田謙三、小出楢重、林武、郷土出身作家の片多徳郎、宇治山哲平、江藤純平などが、常時二十点前後展示してある。

いずれも大半が小品ではあるが、鑑賞者を十二分に楽しませる作品ばかりだと思える。

特に現在では、全く完全抽象となっている佐藤敬の人物画、猪熊弦一郎の独特な風景画など意外性や作家の表現様式の変遷の一端を垣間見る事のできる作品でもあり、興味深いのではないだろうか。

彫刻も数は少ないが、朝倉響子の女性像、木内克のブロンズなど、わかりやすく親しまれるものがある。

考古、歴史、民俗に関する展示品は、主に、地元発掘の土器や、温泉資料などで、郷土色豊かな展示品として好評である。

特に民俗資料の昔の道具、ブリキの玩具、セルロイド製品などは現在では新鮮な印象を与えるらしく、若い人達にも好評である。

ユニークな展示室として開設当初から人気のあったのが漫画家、富永一朗の原画室で、来館者にホッと息のつける場所となっている。[4]

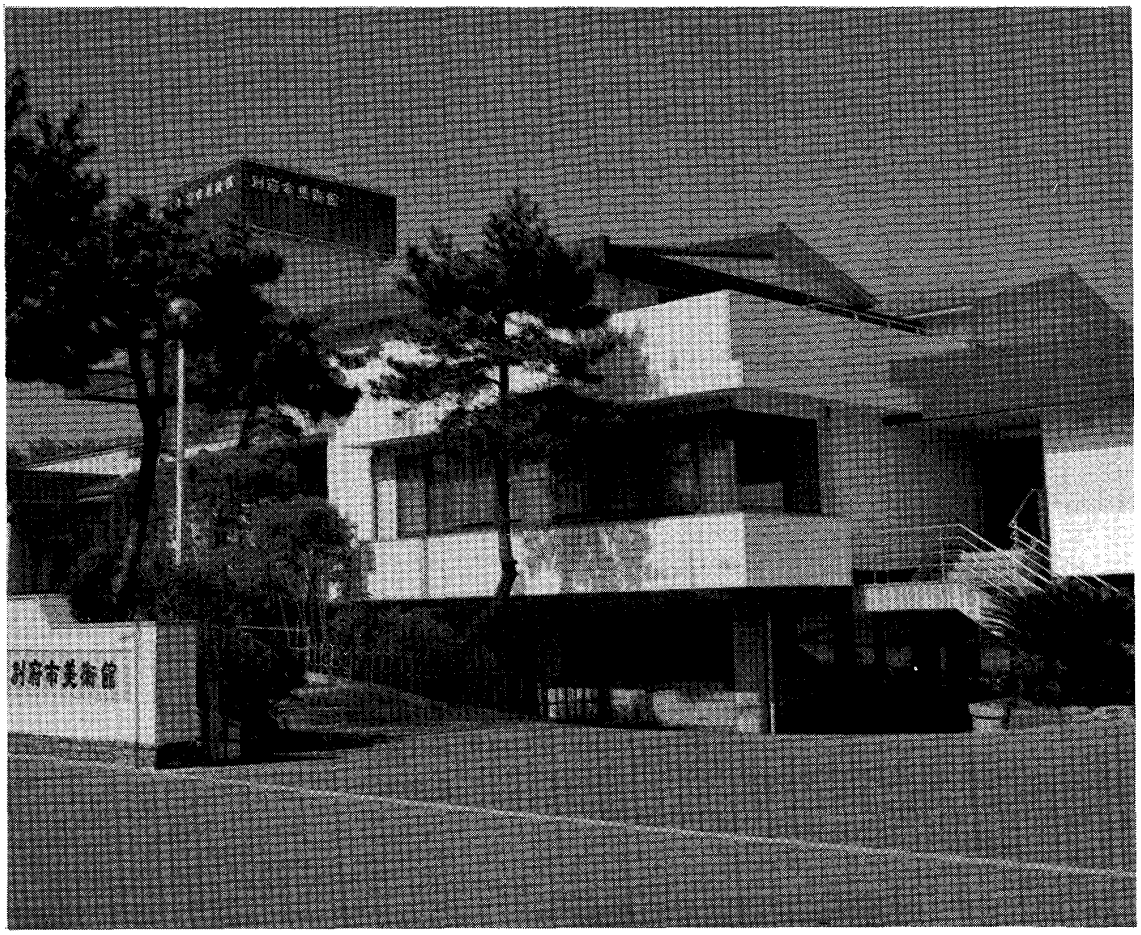
独創的な発想が、軽妙なタッチと、色鉛筆のみの丁寧な着色で表現され、発色の美しさとユーモアのある画面が時の経つのを忘れさせる様である。

この他、二、〇〇〇点にのぼる独楽の展示コーナー、郷土の懐かしい写真、温泉関係資料など、多くの物を展示している。

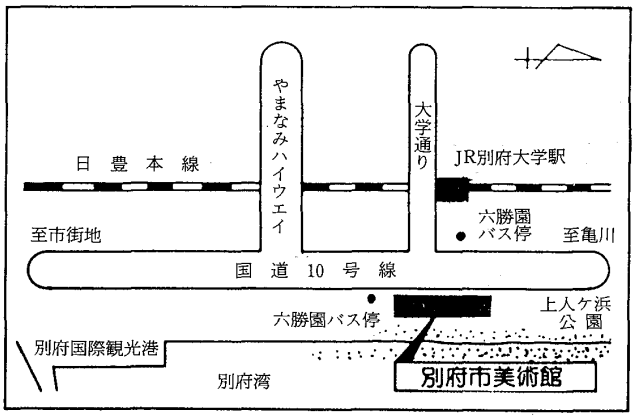
以上、大変大まかに当館の由来、所蔵品などを紹介したが、次に代表的な作品、展示物などを、個々に紹介して行きたいと思う。

II

これより紹介する図版作品データは、作品名、作家名、制作年、材質・技法、寸法（たて×よこ　単位センチメートル）の順とする。



挿図1　美術館前景



■交　通　亀の井、大分交通バス　六勝園バス停前
■所在地　別府市上人ケ浜町1番1号
■電　話　(0977) 67-0189

挿図2

★開館時間……午前9時～午後4時
★休 館 日……月曜・祝日・年末年始

	区　分	普通観覧料	団体観覧料
観覧料	小学生・中学生・養護学校児童生徒	50円	30円
	高校生・大学生・一般	100円	70円
備考	1．団体は20人以上です。 2．小・中・養護学校で学校引率の場合は無料です。		

「桃」　福田平八郎（図版1）
一九四九年頃　紙本・着彩
四〇・九×五三・〇

明治二十五年大分市に生まれる。
明治四十五年に在学中の大分中学を中退、京都市立絵画専門学校別科入学。二年後京都市立美術工芸学校本科進学。
のち、京都市立絵画専門学校に入学し、大正七年卒業。翌八年第一回帝展に「雪」を出品し、初入選する。第四回帝展出品作「鶴」で無鑑査特選。三十二歳で帝展委員となり、母校の絵画専門学校で助教授として務める。
昭和七年、中村岳陵、牧野虎雄らと六潮会を結成、閉鎖的な京都の日本画壇から、広く東京の洋画壇とも交流した。
帝国芸術院会員、日本芸術院会員、日展理事、第一回毎日美術賞受賞。昭和三十六年文化勲章を受賞する。
先にも紹介したとおり、当館所蔵品の収集活動には大変助力して下さった方である。特にこの作品は、美術館の為にと描いて下さった作品である。
生涯の大半を京都ですごしたにもかかわらず、京都弁の中の大分訛りは終生脱ける事がなかったそうだが、そういう郷土への愛着がこの作品には含まれているのではないだろうか。[5]
朱色の丸盆に載せられた白桃は、描かれて三十数年、見る度ごとにみずみずしく、豊かな美しい生命をもって存在している様である。

「鴨」　山口華楊（図版2）
制作年不詳　紙本・着彩
四八・五×五三・〇

明治三十二年京都に生まれる。
本名米次郎。友禅の彩色家の次男として、十二歳の頃から西村五雲に師事した。
大正五年京都市立絵画専門学校選科入学、同年の第十回文展に初入選する。
のち、帝展、新文展、日展に出品、丸山四条派の伝統をくみながら清澄典雅な独自の世界を築いた。
花鳥画、特に動物画には秀れた作品が多く第一人者として活躍する。
のち、母校教授、画塾晨鳥社主宰として多く後進を育て、昭和四十六年日本芸術院会員。昭和五十六年文化勲章受賞。
写実と装飾の均衡に、新鮮な造形感覚が加味された華楊の作品は、正統派の京都丸山、四条派を現代的に展開したものであるとされている。[6]
華楊の作品は、どれもが自然と作者の関係があたたかく、友好的に感じられる。
この作品は二羽の鴨を描いたものだが、それぞれの形体の面白さや、関係の調和、造形的にも、色彩的にも美しく、寒風に耐える鴨の様子と、侘びしい冬の日のワンシーンが、しみじみとした生への愛情で描かれている作品である。

「夏峰」　村上華岳（図版３）
制作年不詳　紙本・水墨
五三・四×三四・五
明治二十一年大阪に生まれる。
旧姓武田、本名震一。武田信玄で名高い甲州の武田家の末裔の家に生まれるが、実家廃絶とともに、叔母の村上家の養子となる。[7]
京都市立美術工芸学校から絵画専門学校へ進み、竹内栖鳳に師事する。
明治四十四年絵画専門学校卒業、卒業制作の「二月の頃」を文展に出品し、褒状を受ける。
大正六年第十回文展に出品した「阿弥陀」が特選となり、翌七年、同期生の土田麦僊、小野竹喬などと国画創作協会を結成。翌年より毎年出品をつづけた。
大正十五年の第五回国展に「松山雲烟」を出品したのを最後に退会、画壇を去る。
翌年三十九歳で神戸市花隅の旧居に籠り、隠栖の生活に入って行く。のちはもっぱら仏画と山水画を描き、また、同時に自らを厳しく見つめる手記や画論を多く残した。
山は華岳にとって一つの大きな画題であった。それはもうひとつの仏という画題と対になり、彼自身、「山水菩薩」「仏陀山水」とも語っている。[8]
この作品も、ある種仏画の様に清浄とした画面をもち、華岳独自の世界観が、格調高い画法によって描かれている。

「湖畔」　堂本印象（図版４）
制作年不詳　絹本・着彩
四八・五×五三・〇
明治二十四年京都に生まれる。
本名三之助。明治四十三年京都市立美術工芸学校図案科卒業。図案の仕事に就くが、画家を志して大正七年、京都市立絵画専門学校へ入学。翌八年西山翠嶂主宰の青甲社へ入塾する。
帝展の初期から好成績をあげて認められ、昭和二十五年日本芸術院会員。同三十六年文化勲章受賞。
印象は、画風の多彩さと画題の豊富さにおいては、どの画家よりも勝るであろうと言われている。[9]
写生的手法、大和絵的、南画風、装飾画風、仏教的主題、歴史、現代風俗画、人物、花鳥画等々。この多彩な試みが生涯に渡って繰り広げられるのである。
この作品は、印象晩年の作ではないだろうかと推測されているが、正確な事はまだ解っていない。
しかし、戦後から見られる抽象画化の傾向も各所に見られ、近代的な美しい色彩の作品となっている。樹木や幹や葉の表現、水面の表現などに印象独自の作風が見うけられる。

「裸婦」　安井曽太郎（図版５）
一九一三年　キャンバス・油彩
七二・七×六〇・六
明治二十一年京都に生まれる。

明治三十七年聖護院洋画研究所に入り、浅井忠、鹿子木孟郎に師事する。

明治四十年渡仏。この年初めてセザンヌの作品を見、のち傾倒して行く。

アカデミー・ジュリアンで三年間学んだのち、アカデミーをやめ、以後自由制作に移る。

ミレー、ピサロ、カミーユなどの作風を研究、中でもセザンヌには強く刺激を受ける。

大正三年帰国。以後二科展を中心に活躍する。昭和初年頃から日本の風土に立脚した独自の様式を求め、その作風は「安井様式」として画壇に確固とした地位を築いた。

昭和二十七年文化勲章受賞。

この作品は、帰国後の二科会に、滞欧作を出品した折の一点で、当時の当館受入れ台帳の記録では「黒き髪の女」の題名で出品されている。[10]

同時期の作品に「縫物をする女」（個人所蔵）がある。

一見してセザンヌやルノワールの要素を見い出す事もできるが、人物を大きな塊としてとらえ、色面で明暗や質感を描き出し、色彩が互いに共鳴し合って、美しい重量感のある作品となり、セザンヌやルノワールの模作のみにはとどまってはいない。

後年、安井が別府を訪れた際、この画と対面し、「懐かしい作品だ」と語ったそうであるが、安井にとっては、万感の意味ある作品のひとつなのだろう。

なお、この作品は昭和六十二年度に大分県立芸術会館で開催された「大分県立芸術会館創立十周年記念、近代洋画のあゆみ展」に出品された。

「小姐」（シャオチェイ）　梅原龍三郎（図版6）

一九四〇年　和紙・油彩

六五・〇×五三・〇

明治二十一年京都に生まれる。

本名良三郎。初め伊藤快彦の画塾で学び、のち聖護院洋画研究所で浅井忠に師事する。

明治四十一年渡仏、アカデミー・ジュリアンに入学、翌年、アカデミー・ランソンに移る。滞仏中はルノワールの作風に傾倒し、カニューのアトリエを尋ね、師事した。

大正二年帰国、白華社主催の個展で滞欧作を発表、翌年、二科会創立に参加する。この折、良三郎を龍三郎と改名。

大正六年二科会退会、再び渡欧。大正十年帰国、同十四年国画創作協会洋画部設立。のち東京美術学校教授、帝室技芸員歴任、美術学校を辞めてからのちは、芸術院会員なども辞任、自由に作画活動をしたいとして、各地を旅行、独自の「梅原様式」を確立した。

昭和二十七年文化勲章受賞。

梅原は昭和八年から十八年にかけて度々中国を訪れ、一連の作品を残している。

この作品も、そうした折に描かれたものであろう。対象を的確に把握する眼力というものが、画面上で、スピード感ある確固とした筆致となってあらわれている。

全体的に緑色系で統一され、逞しい、明快な色彩で、独特な梅原様式を示している。

ちなみにモデルは李香蘭と呼ばれた頃の山口淑子だとされている。

「卓上草花」　小出楢重（図版７）

一九二七年　キャンバス・油彩

一〇六・〇×五四・〇

明治二十年大阪に生まれる。

早くから絵に対する教育を受け、四条派の渡辺祥益に日本画を学ぶ。

明治四十年東京美術学校西洋画科を受験するが、日本画科に編入、のち洋画科に転科する。大正三年美術学校卒業。

卒業後大正七年まで毎年文展に出品するが落選がつづく。同八年広津和郎らのすすめで第六回二科展に「Ｎの家族」を出品、樗牛賞を受ける。翌第七回二科展に「お梅の像」を出品、二科賞となり、会友に推挙される。

大正十年二科会会員となる。同十三年鍋井克之らと大阪に信濃橋洋画研究所を開設、関西洋画壇の指導者として後進を育てた。

この画の卓は、楢重気に入りのもので、他の作品にもよく見る事ができる。たとえば一九二七年の「卓上蔬菜」（一〇六・〇×五四・五）などは、構図も、位置も、サイズも全く同じであり、卓の上のモチーフのみが替わっているだけの作品である。よく磨かれた卓の上に、あふれる程の花々が、濃厚な色彩と、不思議な形態で描かれている。

この作品は、ある個人の所蔵品であったものが、売り立てに出され、偶然発見されたものであった。その好機に浴したのが当館であった事は、実に好運な事であった。

なお、この作品は、昭和六十二年度に開催された朝日新聞社主催「小出楢重生誕百年展」（群馬県立近代美術館）に十月三日から十月二十五日まで展示された。

「金魚」　佐藤　敬（図版８）

一九四九年　キャンバス・油彩

七三・〇×六一・〇

明治三十九年大分市に生まれる。

大正十五年東京美術学校西洋画科に入学する。在学中より帝展に出品、昭和四年第十回帝展初入選。翌五年から九年まで滞仏。

滞仏中の昭和六年美術学校卒業。パリ滞在中にはサロン・ドートンヌに出品を続け、帝展にも作品を送りつづけた。

昭和七年第十三回帝展「レ・クルン」が特選。昭和十一年新制作派協会を創立、以後同会で活躍をつづける。

昭和二十七年、再び渡仏、以後パリに居を定め、パリを中心に個展開催や国際美術展などに出品した。

佐藤敬が一家と共に別府に移り住んだのは明治四十五年、敬が六歳の頃からであったが、別府出身の世界的な洋画家としての印象よりも、少年佐藤敬の印象の方が強いのだろう。敬を知る人々の話は、実に親しみ深いものが感じられる。

当館所蔵の敬の作品は、これとは別に、一九四八年作の「パンを持つ子」（六一・〇×四六・〇）の油彩画がもう一点ある。

両方を並べてみると作風の変化が進行形で見る事ができるだろう。

前作の「パンを持つ子」よりも画面がさらに単純化され、色彩も明るく、明快な色面で楽しい作品となっている。

「親子猫」　木内　克（図版9）
一九六〇年　ブロンズ
高さ　三〇

明治二十五年水戸市に生まれる。
朝倉文夫に師事し、大正五年より文展、帝展に出品。大正十年から昭和十年まで滞仏。
滞仏中はブールデルに学び、また、各地の美術館を巡り、独学にもはげむ。特にギリシャ彫刻には強い感銘をうけ、のち、独自のテラコッタ彫刻を確立する。サロン・デ・ザンデパンダン、サロン・ドートンヌに出品。
帰国後、昭和十三年二科会会友へ、のち脱会。昭和二十三年新樹会招待、会員となる。昭和二十六年「臥像」が第三会毎日美術賞受賞。
昭和三十七年現代日本美術展に出品した「座像」が優秀賞受賞。同四十五年第一回中原悌二郎賞受賞。四十七年には勲三等瑞宝章をうける。
特に裸婦像を多く制作し、「人魚」「裸婦」などの連作で知られる。
師の朝倉は、大変な猫好きであったらしくアトリエにも常に数匹の猫がいたそうである。木内もまた、大変な猫好きであった。さまざまに変化する形態が、彫刻という立体造形には適しているのかもしれない。また、自由を愛し、束縛を嫌う性質が、生涯在野反骨精神を貫いた木内の内面と相通じるものがあったのかもしれない。

ほぼ正方形の立体として表現された親猫の足の間から、頭ばかりが大きな仔猫がヒョッコリと顔をのぞかせている。親猫の憂し気な表情と仔猫の様子が、ユーモラスではあるがあたたかい愛情も感じられる作品である。

III

さて、次に紹介する資料については、すでに発行されている「別府市の文化財」に詳しく述べられている。以下にそれを参考にしながら述べてみよう。
「金銅製唐草文透彫金具」（六・〇㌢×一〇・〇㌢）昭和四十三年、大分県重要文化財の指定を受ける（図版10）。
市内の各所には史跡が点在するが、そのひとつ、太郎塚古墳と名づけられた古墳から発見されたもの。
銅地板にパルメット唐草文様の透彫をあて、それを外縁心臓形をした金具で鋲留めしたものである。主文様は四区に分かれてパルメット唐草が配置されている。中央には楕円形の穴があり、銜先と引手の結節が行われていたと見られる。銅地に金箔をかけた壮麗な仕上がりを想像させる。
パルメット唐草文様が我国において盛行したのは飛鳥時代で、法隆寺を中心とする当時の遺品にこれらを多く見る事ができる。
この金具のパルメット唐草文様も、雄渾なる手法で作られ、これが舶載品である可能性も残されている。
パルメット唐草文様が、中国において流行したのは六朝時代であり、

その風習は隋、唐の時代にもさかんに受けつがれて行った。この金具に見えるパルメット唐草文様の起源は、おそらく六朝時代に求められるであろうが、少なくとも我国パルメット唐草文様の工芸資料の一つとして実に貴重なものであると言える。

次に本館より徒歩三十分程の所にある「鬼の岩屋一号墳・二号墳」から出土した須恵器について述べよう（昭和三十二年国指定重要文化財）。

鬼の岩屋遺跡は横穴式石室を主体とする後期古墳で六世紀末に築造されたと推定される装飾古墳である。

円文、蕨手文をはじめとする多数の壁画が発見され、貴重な装飾古墳である事が確認されている。[11] この須恵器（図版11）は、その第一古墳の西側より発見されたもので、昭和四十二年に市指定重要文化財となっている。総数は十五個であった。（土師器の壺一、須恵器の堤瓶二、平瓶二、横瓶一、瓻（はそう）一、脚付盌（まり）一、脚付坩（つぼ）一、坏（つき）および蓋六）その内の完成品であり、右より堤瓶、瓻、平瓶である。

土師器と須恵器は、ともに古墳時代に制作使用されたものであるが、前者が伝統的なものであるのに対して、須恵器は朝鮮より渡来した新しい窯業技術によって制作された陶器類である。

日本における須恵器の生産は五世紀半ば頃までには開始されたと推定されており、台地の斜面を利用した登り窯で、約一、〇〇〇～一、二〇〇度前後の温度で焼成されたと推定されている。

市内では六ケ所程の各台地[12]から採集されているがこの様な完成品は全く無く、その意味でも貴重な資料である。

ところで本館の展示コーナーの中に、郷土色豊かな温泉資料の展示があるが、その中でも、他県からの来館者が強く興味を示すものに「温の花小屋」と「温の花」がある。

「温の花小屋」は実物の二分の一の模型であるが、藁葺きの小屋で、現在でも実際に明礬温泉場で使用されている（図版12）。

温の花小屋は、そこから「温の花」（図版13）を採集するものであるが、古くから明礬温泉の特産物として、また、別府の特産物として広く知られているものである。

硫黄を主成分とした温泉沈澱物とは異なり鉄明礬石の結晶を主としたもので、噴気からの作用で粘土から新たに生成する二次鉱物だという特徴をもっている。

この様な鉱物は水に溶けやすく、野外では自然に見られる事は少ないものである。

地面に出て来る温泉の噴気を溝で小屋の中に導き、その上に青色の粘土をしきつめる。噴気には水蒸気の外に硫化水素が含まれているので、上昇し、冷えるにつれて粘土中で蒸気が液化した水と硫化水素から硫酸ができる。

その硫酸と、粘土が含むアルミニウム、鉄などが化合して鉄明礬の結晶を作り、粘土の上で成長する。それを採集するのである。

これを一般家庭の沸かし湯の浴槽に入れると、温泉効果があるとされ、古くから重宝がられているものである。

明礬は水に溶けやすいので雨露を防ぎ、また小屋の中には適度な湿気が必要なため、現在でも藁葺き小屋でなくてはならないのである。[13]

Ⅳ

さて、先述のとおり美術展示エリア、考古、歴史・民俗展示エリアより重要な作品や資料を紹介して来たが、屋外の様子も少し案内しよう。

当館の裏手は、先にも述べた様に、別府で唯一の自然海岸地帯である。季節になると潮干狩りを楽しむ家族連れの姿が多く見られるし、一年を通じて釣を楽しむ人々の姿も絶えない。

野鳥の姿もよく見る事ができる。雀やカラスは年中だが、水面に映る美しい姿の白鷺、獲物を捕えて雄々と飛ぶ鳶、海面に無数に休む鷗の姿など、四季折々の美しい自然が、これもまた、まるで一幅の絵の如く来館者の目を楽しませている。

ちょうど位置的にも別府湾が一望できる所でもあり、左手に国東半島、右手に大分市の臨海工業地帯、さらに晴天の日には正面に四国の佐多岬も望め、まさに、六勝園記そのままの風景を彷彿させる。

当館の表玄関には、大分県重要文化財指定の正安銘五輪塔や国東塔などの石塔群を配している。

この正安銘五輪塔（図版14）は、もと東国東郡の原野に所在していたものだが、県外に搬出される直前に発見され、当館に展示される様になったもの。

構造は、長足の五輪塔を方柱状に置いた形式で、方柱上の五輪塔の水輪は、四方を円板状に削り、各面に、バ、バー、バン、バク、の梵字が薬研彫りで見られ、総高は二・〇三㍍、方柱は高さ一・一㍍、横幅は下部は〇・三四～〇・三一㍍、上部〇・三〇～〇・二七㍍であり、地輪は高さ〇・三一㍍、水輪円板の径〇・二四㍍、火輪の高さ〇・一四㍍、風輪の高さ〇・一㍍、空輪の高さは〇・一四㍍で、五輪の各部四方に、発心門、修業門、菩提門、涅槃門の梵字が刻まれ、方柱各部には、梵字ならびに「南無阿弥陀佛」・「正安元年（一二九九）九月」などの銘文がある。（図版15）

次に「文永銘笠塔婆」については、総高一・八㍍、硬質輝石安山岩で造られ、その構造は板状の塔身部と笠および請花、宝珠からなり、基礎の施設は別段見受けられない。

塔身は全面を削平してあるが、他の三面はほとんど加工のあとはなく自然のままである。

そして下部は大きく、上部にいくにしたがって次第に細くなっている。塔身の頂部には枘が造り出され、これが笠にうがった孔にはめこまれる様になっている。

笠は円形に近いものでその上部の宝珠と請花とは一石からなっている。

各部の大きさは、塔身の高さ一・四三㍍、幅は下部〇・五九㍍、上部にゆく程細くなり最上部は〇・一八㍍、頂部に高さ〇・〇四㍍の枘がついている。

側面下部の幅は〇・一六㍍、上部は〇・一五㍍でほぼ同幅であるが、最上部は急に細くなり〇・一二㍍程度となっている。

笠は高さ〇・一五㍍、請花は〇・〇七㍍、宝珠は〇・一三㍍である。

なお、塔身正面上部にバク、その下方に大きくキリークと種子が薬研彫りされており、その下方に「文永六年己巳四月十五日造立者僧廣

坊右志者爲住生極楽」と刻銘される。

すなわち中央に大きく文永六年（一二六九）と陰刻され、向かって左側に造立の理由、向かって右側に造立者名が小さく陰刻されている。[13]

この様な石塔群が、当館の表玄関、および、前庭の各所の植え込みの中に、野外展示品として自然の風情そのままに配され、春は桜、秋は紅葉の中で、趣のある風景を与えている。

V

以上、当館の屋内外の作品や展示物について紹介して来たが、まだまだ未整理なものが多く、十分に時間をかけて研究し整理していくことが今後の課題となっている。

美術作品展示エリアの活動も、目下の所は所蔵品の常設展示のみにとどまっており、いかに多様な見学者に対して社会教育機関としての立場から、どのようにアプローチして行くかが今後の問題である。

とりわけ、美術館が本来ならば社会教育の場として積極的に収集・保存・展示・普及活動を行うべきであるにもかかわらず、大半が既存の寄贈品からなる所蔵品についての展示活動一点にのみにとどまっている事も早急に解決しなければならない重大な問題であると言えよう。

したがって、当館では基本的なことから教育普及活動を推進させるために少しでも見学者と物（資料）との関わりをより効果的に印象づけようと考えて、昭和六十二年度から、歴史民俗資料等については、比較的利用度の高い小学校三年生を対象に、簡単な質問事項を印刷して折りこんだパンプレットを配布し、ワーク・シートの初歩的試験を行っている。[15]

目下の所は、まだまだ実験段階であり、その効果も日が浅いため余り大きくないが、将来的見通しの観点から物（資料）に対して一層興味を抱かせる積極的かつ効果的方法として持続的に実施していく計画である。

今後は、美術作品展示エリアにおけるワーク・シートの制作を含め、見学者の立場や年齢に応じたワークシートの活用、及び展示の意図や目的を平明にすると同時に内容の理解を十二分に助長するような、自由で創造的世界が広げられる展示空間を創る美術館活動が重大な課題となって行くのではないだろうか。

註

①② 「第一章　昔と今の海岸線（上人ケ浜と六勝園）」（『別府市誌』別府市役所）昭和六十年

なお、六勝園についての詳しい記載が左記の様に「六勝園記」として『別府市誌』に載せられている。

「新地居於大別府之中央
海岸白砂青松　有温泉与清水湧出
乃以兼温冷海三浴　而古昔高一遍
上人　九州巡錫登岸之舊趾
他其趾仍在風光明媚　可掬銀波而
仰青山足以楽心目　且往来尤便
蓋此園勝於他者有六
故題之謂六勝園為　」

③ 昭和五十八年八月、旧海浜ホテル所有者、故菅沼公吉氏の遺言により別府

市に寄贈、同五十九年一月より内装工事、五月十日に美術館として開館。

④ なお、この原画は、富永一朗『漫画集　一朗ミステリー』（日本芸術出版昭和五十八年）に収録。

⑤ 宮崎豊「福田平八郎」（『郷土の先覚者シリーズ　第六集』郷土の先覚者シリーズ発刊会）昭和五十一年　一五二頁。

⑥ 島田康寛「山口華楊」（『日本画の遺産』マリア書房）昭和六十二年　一七八頁。

⑦⑧ ＮＨＫ日曜美術館「私と村上華岳―夜桜図の世界より）秦恒平　司会　河路勝、太田治子」による。

⑨ 島田康寛「堂本印象」（『日本画の遺産』マリア書房）昭和六十二年　一一〇頁。

⑩ 当館の安井に関する資料の中に「昭和三十一年に東京国立近代美術館で開催された安井曽太郎遺作展、目録番号三十七番に掲載」というメモがある。なお、「鬼の岩屋第二号墳」については、以下のような論著がある。

坂田邦洋、副枝幸治「鬼の岩屋第二号古墳の壁画について」（『別府大学紀要　第二十六号』）一九八五年

宇野宣彦「鬼の岩屋二号古墳の壁画装飾について」（『芸術学論叢　第六号』）一九八三年

「鬼の岩屋一号墳と二号墳について」（『別府市の文化財』別府市教育委員会、別府市文化財調査委員会）昭和五十八年

⑪ 「大分県の装飾古墳」（『大分県史　美術篇』大分県）昭和五十六年参照

⑫ 別府市内では、小坂、亀川、北石垣、吉弘、南石垣、浜脇地区の台地

⑬ 以上については『別府市の文化財』（別府市教育委員会、別府市文化財調査委員会　昭和五十八年）所収の「金銅制唐草文透彫鏡板」（五十一頁）、「塚原出土の須恵器」（五十三頁）、「湯の花小屋」（七十一頁）参照。

⑭ 以上については、前掲『別府市の文化財』を参照。

⑮ 『ミュージアム　ワーク・シート』丹青総合研究所　昭和六十二年

参考文献

『新潮世界美術事典』新潮社　昭和六十年

『日本画の遺産』マリア書房　昭和六十二年

『カンバス日本の名画』中央公論社

『日本の名画』講談社

『現代日本美術全集』集英社　一九七七年

『別府市誌』別府市　昭和六十年

『別府市の文化財』別府市教育委員会、別府市文化財調査委員会　昭和五十八年

『日本の美術館　九州／沖縄』ぎょうせい　昭和六十二年

各種展覧会目録